

に め じ は

バブル経済が過去のものとなり、景気の沈静化とともに、人々の目はようやく足元に向かうようになった。そして、そこで見出したものは自分たちの暮らしをゆさぶるさまざまな社会状況の変動や、それに伴う価値観の変化だった。

中でも大きな社会問題となりつつあるのが、少子化と高齢化の進行だろう。二十一世紀はじめの五人に一人が高齢者という社会においては、これまでのピラミッド型の人口構成をもとにつくられていた社会システムは機能しなくなるに違いない。すでに介護の問題が大きく浮上し、ダイサービスをはじめ、さまざまなサービスへのニーズが高まっている。それと同時に、互いに個々の生活を重視しがちであった都市生活者の間にも、近隣で支え合ったり、育児機能を発揮したりする地域の役割を、もう一度見直そうとする機運が生まれてきた。

さらに、余暇時間の増大、仕事も遊びも等価とする労働意識への変化などにより、心の豊かさを重視する価値観も本格化している。人々の関心は文化・スポーツ活動に、また、よりよい環境保持に向き、いまや豊かさの中身が問われる時代となっているのである。

そうした内部的な変化のほか、世界的規模での変動も、私たちの生活に影響を及ぼしている。まず何より深刻な問題は、地球的規模の環境問題であろう。それはもはや一国だけの問題として処理できるものではなく、国際的な協力体制が強く求められている。また国際社会のボーダレス化の波は、わが国の国際化に拍車をかけ、隣に外国人が住む風景を身近に出現させている。こうした状況の変化にさらされつつも、バブル経済によって加速された東京一極集中の動きはやまず、横浜の、都市としての経済的・文化的自立を遅らせ、社会の変化に対応する都市づくりを難しくしている。東京への通勤者の増加は、地域社会の成立を難しくし、横浜の活性化にさまざまなかたちで影を落としているのである。

だが、三二七万都市・横浜には、三二七万の市民の暮らしの貌がある。ハイカラや異国情緒といったよそゆきの顔をした横浜から目を足元に向けてみれば、町の路地裏や家庭の中の何気ない風景のうちに、いつの間にか新しい社会の変化に対応している、新しい横浜の貌が、暮らすが、息づいていることに気づくに違いない。

そうした変化を未来のまちづくりに生かし、新しい「横浜らしさ」を創りあげてゆくには、いまこのときの横浜市民の暮らしをまずじっくり見つめたいと思う。そして横浜のいまとこれからについて、みんな語り合うことから始めたい。そこから明日の横浜が見えてくることだろう。

横浜は、いつでも市民の暮らしがじっくりあげ、これからもつくっていくまちだから。